

を経て豊前に通じている。

要するに羽野天満宮・山田原は、まさに交通の要衝にあるのである。現在、この天満宮のすぐ西に大分自動車道日田ICがあるのも偶然ではあるまい。

そうしたことでもあって、この羽野天満宮と山田原の周辺は淡窓・咸宜園、そして廣瀬家にとって、いわば異郷への旅の見送りの場であり、迎えの場であつた。すなわち

・文政十年（一八二七）

九月二、謙吉、山陽ヨリ帰レリ。余、先考ニ陪シテ、門生ヲ引イテ羽

野菅相寺ニ至リ、之ヲ迎ヘタリ。時ニ詩アリ。曰ク

忽傳豊北信。慰我倚門情。昨夜欣無寐。

今朝歩欲輕。稼收添野色。葉落減林声。  
古寺聞相待。茶鑄幾度傾。

・天保七年（一八三六）

四月廿二日。謙吉、家ヲ発シテ東遊ス。早朝、膳ヲ設ケテ之ヲ餞ス。勲平、

元可、尚賢、一郎之レニ関レリ。一郎ハ広島ニ遊フモノナリ。他ノ三  
生ハ謙吉ニ從フナリ。巳牌、家ヲ発ス。予、久兵衛、伸平ト家人ヲ携  
ヘテ、行イテ送ル。奴牌ニ及フマテ二・三十人ナリ。羽野菅相寺ニ至  
リ飲餞ス。送ツテ村端ニ至ツテ別レタリ。塾生四十余人。送ツテ石坂

ノ上ニ至ル。其中、敷輦ハ森実ニ至リ、尤遠キハ中津マテ至レリ。

右の天保七年の謙吉（旭莊）東遊の際の見送りは、淡窓と久兵衛、伸平のほか家人、奴牌に及ぶまで二・三十人という盛大なものであった。そしてここで「菅相寺ニ至リ飲餞ス」とあるのも興味深い。この時は、塾生四十余人が、ここからさらに北の伏木峠にある「石坂」まで送り、さらにそのうち数人は森実（現中津市山国町）に至り、さらには中津まで送つた者もあつた。

### 石坂石畳道（図1・57）

ここに見える「石坂」はいうまでもなく「石坂石畳道」（県史跡）のある石坂である。

石坂石畳道は、日田代官所と中津・宇佐四日市の陣屋を結ぶ往還の一部である。国道二二二号線の日田市市ノ瀬の石畳道の登り口から伏木峠まで全長一・二キロ。道の中央部分に堅い切石を敷き、左右に山の自然

石を敷いている。この道は日田から中津へ通じる主要道路のひとつであつたが、岩や石の露出した難路だつたため、嘉永三年（一八五〇）、隈町の掛屋・京屋作兵衛（山田常良）が周防山口の石工に依頼し築道した。道路完成の翌年、廣瀬淡窓が石坂改修の由来を漢文で撰し、隈町の森昌明の書で「石坂修治碑」という記念碑が建てられ、今も現地に残っている。

羽野天満宮・山田原をめぐる記事では、特に天保十二年（一八四二）の次の記事が、日田から小倉方面に向かう当時の里程を具に知ることができるものとして興味深い。すなわち、

八月二日。謙吉浪華ニ帰ル。余之ヲ送ツテ赤馬関ニ到ラントス。妻及  
婢壹ニ命シテ家ヲ守ラシム。塾政ヲ以テ楨治・祐之二人ニ託ス。範治  
従行セリ。（略）余、謙吉、肩輿ニ乗ル。三生歩行セリ。親族豆田町  
迄送ル。塾生ハ山田原ニ至ル。其中数人、大行寺マダニ至リシ者モアリ。  
大行寺ハ山田ヲ去ルコト一里ナリ。又一里ニシテ宝珠山村ニ至リ、酒  
店ニ憩ヘリ。山田ヨリ此處マデ、八歳ノ時、宝珠山ニ詣テシ時ノ路ナ  
リ。五十年ヲ隔テタル故ニヤ、道路山川ノ景観一モ記憶スル所ナシ。  
當時或ハ他路ヲ行キシモ料リ難シ。小石原ニ至リ、午飯セリ。家ヲ去  
ルコト六里ナリ。原ヲ過キテ山路ニ登ル。名ケテ柴崎トイフ。日田ヨ  
リ小倉ニ至ルマデ第一ノ難處ナリ。此坂アルヲ以テ、官吏ノ往来、皆



石坂石畳道